

日本精神保健社会学会

平成 23 年 9 月 1 日

THE JAPAN ASSOCIATION OF
MENTAL HEALTH SOCIOLOGY

事務局：東京都豊島区西池袋 2-39-8

ローズベイ池袋ビル 3F

<日本学術会議学術研究団体 No.1001>

東京メンタルヘルス株式会社内

TEL 03-3986-3220 FAX 03-3986-3240

ニュースレター第 43 号

発行人：宗像恒次

編集人：上田敏子、窪田辰政

第 17 回学術大会のお知らせ（最終版）

- 開催日：平成 23 年 11 月 12 日（土）
- 会場：筑波大学 東京キャンパス文京校舎 120 教室
- 大会テーマ：立ち直れる社会の条件 ―競い合いと共存―
大会実行委員長 武藤 清栄 副会長（東京メンタルヘルス株式会社所長、当学会副会長）

●プログラム

第 1 部（10：00～12：00）

10：00～ 一般演題発表

12：00～ 昼食・休憩

13：00～13：30 学会総会

第 2 部（13：40～16：30）

<シンポジウム>

- ①「指導命令のハラスメント組織から、個を生かすサポート組織へ」<ハラスメント対策>
岡田 康子氏（株式会社クオレ・シー・キューブ代表取締役）
- ②「競い合ってお互いが助け合う、高めあう企業組織」<競争と共存>
栗原 壮一郎氏（(社）オリエンタル労働衛生協会）
- ③「社員のやりたい仕事を事業化する社会貢献型企業」<先進的な組織>
野田 克己（株式会社 大地を守る会 取締役 管理本部長）

司会 宗像 恒次（筑波大学大学院人間総合科学研究科教授、当学会会長）

17：30～ 懇親会

参加費：1）一般 4,000 円 会員 3,000 円 学生 2,000 円（学生証のコピーが必要）

2）懇親会 4,000 円

3）シンポジウムのみ参加 一律 2,000 円

- 一般演題募集：発表希望者は、演題名を 9 月 19 日（月）までに事務局へお申込みください（FAX または郵送にて）。抄録については、10 月 15 日（土）までに事務局まで提出してください。（抄録枚数：A4 用紙 1 枚程度 書式：タイトルは中央揃え、氏名（所属）は右寄せ 本文の構成については特に指定はありません）

資格研修会参加者の声

第 26 回「初めてでも分かる統計」を受講して

吉田 美和子（筑波大学大学院）

「初めてでも分かる統計」を受講して最初の感想は、とにかく「助かった」の一言である。大学のゼミで、研究論文を読む上で、そして自分の研究を進める上で必要不可欠な統計を長年避けてきたが、もうどうにもならない状況で今回の講座が開講されることを知り、即申し込んだ次第である。

講義は、データ解析の基礎知識、および統計実習の二部構成であったが、全体を通して教えて頂いたのは、その研究によって何を知りたいのか、そのためにどのような統計分析が必要なのかという、研究の基本だったように思う。その軸足を明確にしながら、統計的検定や有意水準、t 検定など具体的内容について丁寧な説明があり、今更人には聞くことができないこれら基本的統計概念について遠慮なく質問することができ、長年の胸のつかえが下りるようだった。

また統計実習では、Excel データ入力や SPSS へのデータ読み込みの手順を体験しながら、講師の経験に基づく、初心者がフラストレーションを覚えやすい入力に際してのコツを学び、続く統計処理では、データの分布や関連、相違の見方、最終的には介入研究のための統計処理の考え方を、具体例を通して学ぶことができた。

統計の本は巷に溢れているが、今回講師の真摯さ、丁寧さ、経験、そして参加者の研究を支援したいという姿勢に触れ、そうした「人」から直接学ぶことの大切さを実感した 3 時間だった。講師のお二方に感謝したい。

熱風 ～理事たちの現場～ Vol.5



畠中 宗一（大阪市立大学大学院生活科学研究科）

研究科の再編に伴って、4 月から臨床心理学コース家族臨床学分野に移動しました。臨床と政策の統合という視点で学際的なアプローチを志向する私にとって、どこに所属するかはそれほど重要ではありません。このようなスタンスが時として、研究科内のバランスをとるための要員と位置づけられることもあるようです。院生は、母親のウェルビーイング、父親のウェルビーイング、メンタルヘルス、司法臨床、潜在助産師問題などをテーマにしています。7 月のゼミ分けて、5 名の学部生が新たに加わり、後期博士課程、前期博士課程、学部学生を合計すると、12 名になります。

しかし、昨年度から評議員、副研究科長、生活科学共同研究センター長などの役割が加わり、月曜から金曜まで大学に出かける毎日です。しかも、研究や教育というより、さまざまな会議に出ることが仕事の過半を占めます。そのため、学生や院生の相談に対応する時間が十分に捻出できないという悩みがあります。このような状況で、研究は思い通りに進んでいません。3 月に科学研究費・基盤研究（B）「情緒的自立に関する総合的研究」（研究代表）の報告書をま

とめました。現在、学内の重点研究や都市研究、基盤研究（B）、戦略研究などの代表や共同研究者としてかかわっていますが、研究としてのアイデンティティは、研究科内の戦略研究「生活基底の変容にともなう新たなライフスタイルの創造—生活科学における「生活の知」に関する探索的研究」にあります。これは、生活科学共同研究センターの研究活動に連動するものです。このテーマには、3. 1 1以降の日本社会が、これまでの利便性や快適性を過剰に追求してきたあり方が維持できなくなったことと関連します。24時間活動する社会を維持するために、原子力に依存しなければならない構造を、それでよいのかといった問題意識を内包するものです。かつての大規模開発の典型例の一つは、受益圏の拡大と受苦圏の局地化という構造のなかで、それぞれの圏域が他者への想像力が働かない形で併存していました。このような構造を持つ紛争は、解決が困難でした。今回の東日本大震災とそれに随伴した原発事故は、われわれの生活の基底が、いかに不安定な状況のもとに構成されていたかを明らかにしました。われわれは、足が地に着いた生活とはどのようなものかを再度考えておく必要があるのではないのでしょうか。

またキャタリストとして日本IPR研究会が主催するIPRトレーニングに継続的に参加していますが、これは私の唯一の臨床の場でもあります。Tグループの流れを汲むため、不幸な歴史を払拭させることは難しいのですが、エンカウンター・グループなどとの差異化を図っていくことも課題です。客観的な時計時間と主観的な体験時間は、矛盾しながら一つの事実性を構成しています。したがって、この二つの時間のどちらかに収斂させるのではなく、限られた時計時間のなかで、主観的な体験時間を限りなく膨らませることが、「いま、ここで」を生きることと理解します。時間が来て席を立つキャタリストに、非受容的と言われたことがあります。時間の有限性のなかで精一杯生き切ることの意味が理解されないと、誤解を生むことになります。また「見る—見られる」まなざしの交差は、対人関係が相互身体的であることを意味します。キャタリストはメンバーでもあります。結果として **change agent** としての役割を果たすこともあります。このように治療を目的とするエンカウンター・グループとは、さまざまな違いが浮上してきます。

加えて、教育や医療をはじめとするビジネス・モデルの拡散・拡大は、無時間モデルが普及していくことでもあるわけですが、そのことは、われわれの生活感覚を分節化し、アイデンティティの維持を困難にしています。体験時間が体験時間として機能する社会を志向することがなければ、あるいはルーティーン化された日常を積み重ねることがなければ、われわれの日常は、すべて細切れの断片に変質し、アイデンティティの危機を体験するのではないのでしょうか。メンタルヘルスへの関心は、われわれのライフスタイルを根底から考え直すことで見えてくるものが大きいように想像します。

関連学会情報

～第18回日本運動・スポーツ科学学会に参加して～

山口 豊¹⁾，亀川 かすみ¹⁾，窪田 辰政²⁾

¹⁾ 筑波大学，²⁾ 静岡産業大学

2011年6月25日に、日本体育大学世田谷キャンパスにて「第18回日本運動・スポーツ科学学会」が開催された。本学会は「体育・スポーツに関する学術研究と教育を推進し、その成果を社会に還元することで、人類の福祉や文化の向上を目指す学術団体」である。今回の大会

は、各大学の研究者、専門家により、特別講演や口頭・ポスター発表が行われ最新の研究成果が発表された。大会の様子と口頭発表に参加した筆者の報告をする。

特別講演では、具志堅幸司氏（日本体育大学教授）により、「本気になれば何かが変わる一私と体操」と題して、体操を志した経緯や2度にわたる大きな怪我の克服を通じて、ロサンゼルスオリンピックでの金メダル獲得までの感動的な勝利についての講演がなされた。

大学構内に設けられたポスター会場では、「ゴルフ」「バランストレーニング」「健康体操教室」「体育授業の実践と評価」など7件の発表がなされた。口頭発表においては、「プロ野球選手の社会福祉活動」「高齢者トレーニング」「女子レスリングのタックル処理時間と動作」などの9件が発表された。筆者は「テニスにおけるサービスの正確性を高めるためのSATカウンセリング支援に関する研究」と題し、SATカウンセリングを用いてテニスプレーヤーに介入し、介入前後で心理特性の測定とサービスの正確性に関する実験を実施した。その結果、心理特性は有意に改善し、サービス実験においては、正確性が向上した。これはスポーツ心理学への新しい介入研究となったと言える。参加者からは、サービスの強さについての意見も聞かれ、今後の研究をすすめる上で貴重な意見を頂くことができた。

本学会への参加を通して、社会におけるスポーツの多面的な役割が、参加者全体で再認識されたといえる。特に、今年の東日本大震災の被災地や被災者の悲しい報道が多い中で、スポーツをしている被災地の子供たちの元気な姿が放送されると、見ているものを勇気付ける力となり、改めてスポーツの持つ心理社会的な役割の重要性が認識された。